

I-322 形状を考慮したトラス構造物の最適設計に関する一考察

京都大学大学院 学生員 北園良喜
 京都大学工学部 正員 白石成人
 京都大学工学部 正員 古田均

1. まえがき -----トラス構造物の最小重量設計において、固定された形状について部材断面積を決定する設計法に対して、幾何学的形状の変化を含めた設計法の有効性が報告されている。この幾何学的形状とは、TopologyとGeometryにより構成されるものである。そこで、本研究では節点系の設定、部材系の設定、断面諸量の3つを設計の基盤に置き、節点系の設定法、部材消去法、部材付加法による適用例を示し、また座屈条件を考慮した場合の部材付加法を提案し、これらについて考察を加えるものである。

2. Topology と Geometry -----トラス構造物の最小重量設計に関して、重量は Topology と Geometry に影響される。Topology と Geometry の間には相関関係が存在すると考えられ、したがって両者を同時に設計の段階で考慮することが望ましい。しかし、節点数、結合性、節点位置などの未知量を同時に設計の段階で考慮することの困難さから、一般に Topology あるいは Geometry の一方をまず決定し、しかる後に他方に因して最適化が行なわれる。しかるに構造物の設計に当てば、まず構造物の用途を認識し、外荷重条件、その他の制約(空間)を十分に考慮することによって、節点系、部材系の取り扱い方に対する基準的な方針を確定すべきである。以上のことより本節では、これら Geometry と Topology との構造物の重量に対する寄与に関する示唆を得るために、以下に示す計算例について考察を加える。

2-1. 節点系について -----節点系とは、トラスを構成する格点の数、およびそれらの座標位置を含むものであり、設計の第1段階に位置する。この節点系の取り方としては、Dorn らが提案している格子状のものが考えられるが、この手法では最終形状は Ground Structure の影響を受け、残る部材の位置や方向、結合状態は限られたものとなり、Geometry の影響が十分に生かされていない。そこで、本研究ではまず Geometry の影響を調べるために Topology を規定し、Geometry だけに因して節点座標を直接、設計変数に取り入れ、S.L.P 法を用いてその影響を調べた。Fig. 1 に結果を示す。構造物の重量は Geometry によって大きく影響を受けることが分かったが、次に Geometry と Topology との相関を調べるためにモンテカルロ法により節点を発生させる手法を用いた。この手法は、各節点の座標が独立に決まり、節点相互間の影響が考慮されず、節点を最適な方向へ移動させることは不可能であるが、節点系と部材系の相互の関係を調べるために部材の消去も含めて最適な形状を求めた。この手法では、設計領域をある個数のメッシュに任意に分割し、その各小領域内に最大1個の節点を発生させるものである。なお、計算では座屈は考慮されていない。

2-2. 部材系について -----部材系は節点系の確定により大きく支配される副次的なものであるが、その部材数、配置という自由度を未だ持っている。

Dorn らの部材消去法を用いると、Nodal Pattern に対して、すべての可能な節点を連結した Ground Structure から出発し、不要な部材(非基底変数)を除くことにより最適な形状が得られる。しかし、節点数が増大すると、Ground

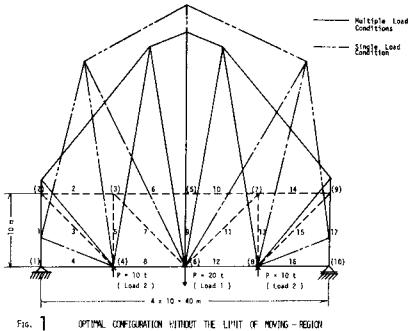


Fig. 1 OPTIMAL CONFIGURATION WITHOUT THE LIMIT OF MOVING-REGION

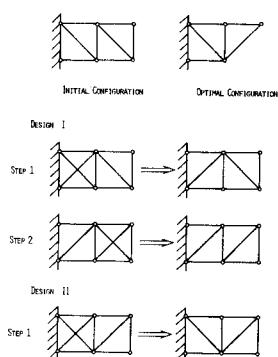


Fig. 2

